

2019/10/31

utilitarianism is a normative argument, not a positivistic model of the world.  
What utilitarianism is saying is not that humans act based on the principle  
of maximizing utility but that they SHOULD.

## 功利主義の公共哲学

功利主義は現代において最も影響力の大きな公共哲学の一つである。功利主義が明確に定式化されたのはJ. ベンサムによってだが、功利主義的なものの考え方はD. ヒュームやA. スミスにも見ることができる。現代において功利主義を主張するのは道徳哲学（倫理学）を専門にする功利主義者たちだが、功利主義的なものの考え方は多くの経済学者や政治学者に共有されている。ある意味では功利主義は現代の最も常識的な考え方だとすら言えるだろう。それだけに、功利主義を批判して、それとは違った考え方を打ち出そうと努力する学者も少なくない。J. ロールズやA. センはその代表である。今回は公共哲学としての功利主義の要点と魅力を確認した上で、それに対する批判も紹介する。

教科書・参考書の対応箇所：山岡／齋藤『改訂版 公共哲学』、2章、川崎／杉田『新版現代政治理論』、4-5章。

### 1. 功利主義(utilitarianism)とは何か？

幸福から苦しみを引いた余りすなわち福利(welfare)を最大化する帰結をもたらすような行為や制度を正しいと判断する理論が功利主義である。代表的な功利主義者たちによる最近の著書から引用しよう。

倫理学の根本問題は「私は何をすべきか？」であり、政治哲学の根本問題は「われわれは社会として何を行うべきか？」だが、両方の問題に対して功利主義は直截な回答を与える。それは簡単に言えば、なすべきことは**最善の帰結をもたらすこと**だ、というものだ。ここで「最善の帰結」というのは、われわれの選択によって影響を受けるあらゆる者にとって、幸福(happiness)から苦しみ(suffering)を引いた余りが、正味で可能な限り最大になることを意味する。その回答は——少なくとも原理上——あらゆる可能な状況をカバーし、われわれのほとんどが目指す価値があると一致して考えるものを指し示す（ラザリ＝ラデク・シンガー『功利主義とは何か』, ix 頁）。

(1)功利主義の3つの特徴：センによる特徴づけが最も標準的である。

①帰結主義(consequentialism)：行為や制度が正しいものであるかは、それらが生み出した・生み出す見通しの高い帰結のよさによってのみ判断される。結果の善し悪しとは別にやるべきことや、やってはいけないことはない。「義務論」(deontology)と対比される「目的論」(teleology)。カントの道徳哲学が義務論の典型。現代ではロールズの正義論が、義務論の立場に立つ。

②福利(or 厚生)主義(welfarism)：考慮されるべき帰結は個人の福利ないし厚生だけである。帰結の善し悪しは「効用情報」のみによって**一元的に評価される**。効用に関係ないが善い帰結というものはない。

③集計主義 (aggregationism)：個人の福利ないし厚生を集計して、その総和(ないしその平

均)を最大化する行為や制度が正しい。こうした計算のことを功利計算と呼ぶ。

(i)総量主義：総効用の最大化を目指す。各人が幸せでなくとも人口を爆発的に増やすべきだという「いとわしい結論」につながる。

(ii)平均主義：平均効用の最大化を目指す。「社会の中で誰の立場に立つのも同じ確率と考える」ことが合理的かという問題がある。

## (2)最大化されるべき福利とは？

①快樂説(hedonism)：個人が主観的に感じる正味の快樂＝幸福(快マイナス苦)。一見とても説得力があるが、R. ノージックによる強力な批判がある。「経験(快樂)機械」の思考実験。  
Matrix scenario

②選好充足(preference satisfaction)説または欲求実現(desire fulfillment)説：快 - 苦とは独立に、個人がその選択によって示す選好ないし欲求が充足されること。経験機械の思考実験による反論を回避できるが、「当人が望んだものならば何でもよいのか」、逆に言えば「当人が望んでいないものはぜんぶダメなのか」という問題に直面する。

③客観的リスト説：快樂からも選好(欲求)からも独立して、人間の幸福を構成すると考えられる客観的な要素がいくつか存在する。これらの要素を実現すること・または実現のための機会や能力を持つことが重要である。権威主義やエリート主義に陥る危険がある。

平均主義か総量主義か  
全体の幸福の平均値を重視するか、総量を重視するか。

## (3)行為功利主義と規則功利主義

①行為功利主義(act utilitarianism)：個々の行為が善い帰結を導くかどうか判断の対象。あらゆる行為に関してつねに功利計算をしなければいけないという難点がある。

②規則功利主義(rule utilitarianism)：個々の行為がそれに従う一般的な規則がおおむね善い帰結を導くかどうか判断の対象。「規則崇拜」に陥って功利主義から離反するか、それとも結局行為功利主義と同じになるかというジレンマに直面する。

## (4)直接功利主義と間接功利主義

①直接功利主義(direct utilitarianism)：行為者が功利主義の原理そのものに従って行為することを命じる。功利主義以外の理由や動機づけで行為することと両立しないという難点がある。

②間接功利主義(indirect utilitarianism)：結果的に福利を最大化できるなら、功利主義の原理以外の理由や動機付けで行為してもかまわない。むしろその方が望ましい場合すらある。誰も功利主義そのものには従わなくてもいいという不思議な結論になる。

## 2. 功利主義の古典理論

功利主義はすぐれて近代的な、新しい理論である。ベンサムは18世紀終わってから19世紀前半にかけて、ミルは19世紀半ばに活躍した。以下ではベンサムとミルの理論のどこが新しかったのかを確認する。

### (1) J. ベンサムの功利主義

①功利主義の独自性：快樂と苦痛という帰結主義的で福利主義的な指標を規範理論に導入

した点、効用最大化という集計主義の計算法を提案した点、義務論や直観主義への批判を準備した点で、功利主義の創始者といえる。

②平等主義と改革主義：効用最大化の原理は文字通り「すべての個人」に等しく当てはまる。「最大多数の最大幸福」を実現するには、多数者の利害を反映させるための議会改革（政治的平等の追求）や、刑罰による過度の苦痛を減らし、受刑者を効果的に更生させるための刑法改革が必要とされる(e.g. 「パノプティコン」の設計)。

## (2) J. S. ミルの功利主義

①自由の尊重：人間の幸福の主要な構成要素は「個性の育成」にある。言い換えると、個人が自由であることが結果的に個人を幸福にし、幸福の最大化にもつながる。したがって、個人の自由は、他人に害を与えないかぎり最大限尊重されるべきである（「危害原理」）。

②立憲デモクラシーの擁護：個人の自由を尊重し、育成するためには、政府および「多数の暴政」(tyranny of the majority) から個人をまもる必要がある。同時に、すべての個人が自己利益の保護のために政治参加の権利をもつことも必要である。ここから、普通選挙制、女性参政権の主張が導かれる。

③功利主義は利己主義ではない：功利主義はたしかに個人の福利を重視するが、利己主義(自分の利益だけを最大化すること)とは違う。すべての人の福利を平等にカウントした上で、関係者すべての福利の総計を最大化することが功利主義の命令である。

## 3. 現代の功利主義

20 世紀以降の功利主義は、経済（学）的には厚生経済学を生み出し、政治（学）的にはおおむねリベラリズムと福祉国家に親和的な立場を取った。それはベンサムやミルの立場に比べればラディカルでなくなったと評されることもある。その一方で、功利主義の道徳哲学は科学技術の進展や地球規模の問題の出現に対応して、新しい主張を展開し続けている。以下ではそうした例についても紹介する。

旧来の厚生経済学＝功利主義の経済学的応用。個人間の効用比較が可能という立場。  
現在の厚生経済学＝功利主義から離れている。個人間の効用比較が可能と断定しない。

### (1) 功利主義の政治

①個人の自由な生き方の肯定：生き方(善の構想)の問題を個人に委ねる。どのような生き方でも本人がそこから満足を得る(その生き方を選好する)かぎり等しく考慮する。生き方についての個人の自由を尊重するという点でリベラリズムと一定の親和性がある。

②福祉国家に対する支持：個人にとって限界効用(marginal utility)が逓減するならば、追加的な資源は現在の効用が低い人に優先的に分配されたほうが、社会全体の総効用(ないし平均効用)を高めることができる。厚生経済学は平等主義的な再分配を正当化し、福祉国家の一つの理論的支えとなった。

※【旧】厚生経済学が功利主義の直接的な継承者であるのに対して、【新】厚生経済学は

①個人の効用を序数的効用だけに限定する、②個人間の効用比較の可能性を否定する点で、厳密には功利主義ではない。

### (2) 功利主義の道徳哲学

①R. M. ハアの功利主義：選好主義と二層理論

「二層理論」(two level theory)：「直観的水準」(規則功利主義)と「批判的水準」(行為功利主義)の組み合わせ。普通の場合には、日常のうちに定着している種々の道徳的直観が妥当する(その方が社会全体の効用は高くなる)。そうした直観が通用しなくなる場合には、「批判的な水準」に移行して、関係者すべての立場に仮想的に立って何が最も選好されているかを推量し、正しい選択肢を特定する(社会全体に長期的に及ぼす帰結も考慮に入れられる)。→ Basically boils down to: only use utilitarianism in case of emergencies and anomalous situations where customary ethics will not maximize benefit.

#### ②P. シンガーのラディカルな功利主義

(a)グローバルな倫理の擁護：内部(自国民・自集団・家族)の優先を正当化する論理は功利主義からは導かれない。最も効果的なやり方(寄付)によって途上国の貧困を救済する義務が、先進国の市民にはある。→ 結果説に基づく功利主義に義務説の要素を入れる。 consequentialism vs teleology

(b)動物の福利の擁護：快・苦を感じる能力は人間という種には限定されない。動物のなかにも"sentient beings"が存在する。「種差別」(speciesism)に対する批判。動物に(過酷な)苦痛を与える畜産("factory farming")や実験等の禁止。

(c)妊娠中絶や安楽死の擁護：苦痛に充ちた存在ないし苦痛を感じない存在(e.g. 神経組織が未発達な段階の胎児や、極度に苦痛が大きく回復の見込みのない傷病者)を死に至らしめることは不正ではない。

Singer focuses on an organisms capacity to feel pain and pleasure, and the irrefutable reality that generally, pleasure is preferred to pain (esp in the case of animals).

#### 4. 功利主義に対する批判

20世紀半ばまでには功利主義は道徳理論、政治理論における支配的な立場と見なされるようになっていた。功利主義的な考え方があまりにも支配的になったせいで、他の考え方もはや生まれず、結果として規範的な政治哲学ないし政治理論は活力を失って衰亡したとみなす立場すらあった。この状況を変えて、功利主義に代わる政治理論を打ち出そうとしたのがロールズやセンである。彼らの功利主義批判と代替理論には説得力があったので、1970年代以降、功利主義はむしろ守勢に立たされるようになった。

##### (1)ロールズによる批判

基本的な主張：個人の基本的な権利を、社会全体の福利(厚生)のために犠牲にすることは許されない(『正義論 改訂版』、6頁)。

①個人間の差異の無視：「功利主義は諸個人間の差異を真剣に受け止めていない」。個人にとっての選択の原理(効用の最大化)を社会全体の選択の原理にしてしまう。その結果、誰かにとって非常に不利益をもたらす行為や制度でも、他の人々にとって大きな利益をもたらすのであれば、帰結としてよい行為や正しい制度とされてしまうことがありうる。

②分配の原理の欠如：「諸個人の間で満足の総和がどのように分配されるか」を問題にしない。満足の総和さえ大きくなるのであれば、不平等な分配が正当化される可能性がある。

③欲求の質や源泉の無視：他者の自由の剥奪や他者に対する差別から引き出される効用も、他の効用と同じように効用計算にカウントされてしまう。例として、多数派が少数派の宗教・民族的出自・性的志向性などを嫌悪しており、少数派を迫害することから「幸福」を感じる場合。「外的選好」(external preference)を計算に含めることの是非。 Imposition of will

④心理的な困難：功利主義は上記の①から③の場合に生じる「犠牲」を、全体の利益の観点から、道徳的に正しいこととして受け入れることを「犠牲者」に要求する(コミットメ



ントの緊張ないし重圧)。これは心理的に無理がある。

## (2)その他の批判

①適応的選好形成(adaptive preference formation)：劣悪な境遇に適応を余儀なくされることにより、**選好(欲求)そのものが萎縮すること**。効用計算はそうした境遇における選好をもカウントしてしまう。例として、教育や労働の機会を与えられない人が、そうした機会そのものを断念し、欲求しなくなってしまう場合。功利主義的には、当人が選好していないものを与えられなくても何も問題はないので、こうした事態の改善は要求されない。

Cooling out of the prevalent value system by the lower class.

②高くつく趣味(expensive tastes)：同一の効用をもたらすのにより多くのコストがかかる選好の容認。贅沢な人が質素な人より優遇される可能性がある。

③「植民地総督府功利主義」(Government House Utilitarianism)：功利主義は、その規則がすべての人に知られていること（公開性）を要求しない。結果として最大化が得られればそれでよいと考える("esoteric morality")。そのため、少数のエリートが、多数を占める人々に、それ自体は功利主義的でない規則を一方的に「教え込む」ことが正当化される。

## 5. 公共哲学としての功利主義 (R. グッディン)

グッディンは功利主義に向けられる批判に応える形で、私的な個人の倫理ではなく、公共的なものについての規範理論としての功利主義だけを擁護しようとしている。すなわち、

①**間接的規則功利主義**の立場は、公共政策についての規範として説得力がある。②なすべきこと（福利の最大化）がはっきりしているかぎり、個人ではなくて国家に責任があることを説得的に示せる（⇨アナーキズム、リバタリアニズム）③私人ではなく公職者のための規範と考えると、功利主義の欠点とされるものはそれほど深刻ではなくなるか、むしろ長所になる。

個人間効用比較

### (1)公の制度についての哲学

- ①一般的な規則や制度にだけ関わる：個々の行為についての細かすぎる計算をしない。
- ②普通の人の普通の利益やニーズがあることを想定する：当人の選好に関わらず、公的な観点から満足すべきニーズ、満足すべきでないニーズがあると認める。
- ③公開性を尊重する：公開された一般的規則に全員が従うことの効用（相互行為の予測可能性）を重視する。

### (2)国家を正当化する哲学

- ①集合的行為の問題（たとえばフリーライダーの存在）を解決する責任を個人や国家以外の集団に負わせることはできないので、国家が責任を負うべき。
- ②国家に協力しない個人は、国家（に協力する他の人々）が道徳的責任を果たすことを妨害しているので、強制されてかまわない。
- ③国家が「物理的安全」を供給する責任を負うとすれば、同じ論理でもって「経済的安全」を供給する責任も負う。

### (3)公職者のための哲学

深刻でなくなる欠点

- ①個人に多くを要求しすぎ：公職者以外の普通の人にはそれほど多くを要求しない。
- ②権利を尊重しない：一般的な政策の問題としては権利と衝突しない。

長所になる欠点

- ①非人格的：個人の特別な利害や愛着から中立的。
- ②打算的：直観的でなく慎重な計算を重視する。
- ③品がない：現世的・実用的な福利以外の要素に左右されない。

## 資料

### ■功利性の原理：ベンサム

功利性(utility)の原理とは、その利益が問題になっている人々の幸福を、増大させるように見えるか、それとも減少させるように見えるかの傾向によって、または同じことを別の言葉で言いかえただけであるが、その幸福を促進するようにみえるか、それともその幸福に対立するようにみえるかによって、すべての行為を是認し、または否認する原理を意味する。…ここでのいう幸福とは、当事者が社会全体である場合には、社会の幸福のことであり、特定の個人である場合には、その個人の幸福のことである。…社会の利益とはなんだろうか。それは社会を構成している個々の成員の利益の総計にほかならない。…したがって、ある行為が社会の幸福を増大させる傾向が、それを減少させる傾向よりも大きい場合には、その行為は〔社会全体について〕功利性の原理に、短くいえば、功利性に適合しているといえることができる（J. ベンサム『道徳および立法の諸原理序説』、82-84 頁）。

### ■最大幸福の原理

「最大幸福の原理」によれば、…究極目的は、質・量ともに、できるだけ苦痛を免れ、できるだけ享受が豊かな生存であり、ほかのあらゆるものが望ましい〔われわれ自身の善を考えるにせよ他人の善を考えるにせよ〕のは、この究極目的に関連するからであり、究極目的のためなのである。…これは、功利主義者の意見によると、人間活動の目的なのだから、必然的にまた道徳の基準でなければならぬ。ここで道徳の基準を定義すれば、人間行為のための準則であり教訓であって、これにしたがえば、先に述べたような生存が、最大可能の範囲で全人類に保障されるものであると言えよう。人類にかぎらず、本性上可能なかぎり、生きとし生けるもの全部に保障されるものである（ミル『功利主義論』、472-73 頁）。

### ■功利主義と利己主義の区別

功利主義を攻撃する人たちがほとんど認めてくれないことなので、ここでも繰り返して言っておきたい。功利主義が正しい行為の基準とするのは、行為者個人の幸福ではなく、関係者全体の幸福なのである。自分の幸福か他人の幸福かを選ぶときに功利主義が行為者に要求するのは、利害関係をもたない善意の第三者のように厳正中立であれ、ということである（ミル『功利主義論』、478 頁）。

### ■功利主義と正義の実現

しかし、この偉大な道徳的義務〔正義〕はなおいっそう深い基礎に立脚している。というのは、それは、道徳の第一原理から直接でてきたものであって、二次的派生的な教義から論理的に引きだしたにすぎない系ではないからである。それは、「功利」または「最大幸福の原理」の意味そのものの中に含まれている。この第一原理は、一人の人間の幸福の程度が〔種類も十分考えて〕他人の幸福と等しいときには、どちらもまったく同等に尊重されるのでないかぎり、つじつまの合わぬ空語である。こういう条件がみたされてはじめて、ベンサム1の金言——「だれでも一人として数え、だれも一人以上に数えてはならない」——が、功利の原理の名のもとに、その説明的な注釈として書けるのである。／…だれでも幸福に対する平等な請求権をもっているというのは、誰もが幸福の条件に対して平等な請求権をもっているということである。…社会的便宜として公認されているものが逆のことを要求しないかぎり、だれもが平等の待遇を受ける権利があるとみられている。だから、もはや便宜でなくなった社会的不平等はすべて、不便を通りこして不正の性格を帯び、いかにも圧政的にみえるので、人々は、どうしてこれまでこんな不平等が見過ごされてきたのかと不審に思いやすい。ところが、不審がる人々自身も、おそらく、同じように便宜を誤解して別の不平等を見過ごしていることを忘れている。この誤解を正せば、いま是認しているものも、彼らがついに非難するに至ったものに劣らず奇々怪々に見えるはずである。社会改革の全歴史は移行の連続であり、社会的生存に何より必要と考えられた習慣や制度が次から次へと、あまねく不正と圧政の烙印をおされてゆく。奴隷と自由人、貴族と平民の区別がそうであった。皮膚の色、人種、性による差別待遇についてもやがてそうなるだろうし、また一部分はすでにそうになっている（ミル『功利主義論』、526-27頁）。

### ■現代功利主義の政治

#### ◆利益に対する平等な配慮

倫理的判断をする際には、私は個人的あるいはセクト的視点を超え、影響を受ける人々全員の利益を考慮に入れなければならない。これが意味するのは、さまざまな利益を比較考量する場合には、利益は単に利益として扱われなければならない、私の利益とかオーストラリア人の利益、あるいはヨーロッパ系の人たちの利益という形で考えられてはならない、ということである。ここから平等についての基本的な原理、すなわち、〈さまざまな利益に対する平等な配慮〉という原理が出てくる（シンガー『実践の倫理 新版』、24頁）。

#### ◆限界効用逓減の法則と平等主義

公平な博愛心を持って批判的思考を行なう人が選ぶ経済的正義の原則が、なぜ穏健な平等主義的なものになるのかについては、いくつかの理由をあげることができる。…第一の理由は、貨幣やほとんどの財に関して、問題になる範囲においては、限界効用が減少するということである。これは、貧しい人が得る貨幣の最後の増加分のほうが、富む人に対する同額の増加分以上に大きな効用を持つ、という効果をもたらす。選好という言葉でいえば、公平な批判的思考を行なう人がこれら両者の立場に身を置くなれば、両方の役割でその

増加分を得ることが不可能な場合、彼は富む人であった場合よりも貧しい人であった場合にその増加分を得るほうを選好するのである（ヘア『道徳的に考える』、244 頁）。

#### ◆異なるライフスタイルの尊重

現代におけるもっとも透徹した功利主義批判者である A・センは、功利主義に共通の要素として、「厚生主義」を摘出した。厚生主義とは、ある事態を効用情報によってのみ評価しようとする立場のことである。／功利主義の魅力の…一端はこの厚生主義に表現されているように思われる。…厚生主義は、現代のように人々の生き方についての理想である善が多様化している状況への、一つの対応として理解することができる。ある人は宗教に自分の生きがいを見つけ、またある人はお菓子のおまけを集めるのに血道を上げる。こういった多様な生き方の間で優劣をつけることは困難である。たとえ優劣をつけることができたとしても、ある生き方を、それを認めていないような人たちに押しつけることがいかに犠牲を伴うものであるかを、われわれは宗教戦争の教訓から学んだはずである。このような状況の中から近代自由主義は、多様な宗教のなかで、いかにして公共社会としての統一性を保つかという問題設定を携えて、登場してきたのである。／厚生主義は、この問題設定を継承している面がある。つまり、厚生主義は生き方の問題に対しては、個人にその決定を委ねていて、個人がどのような生き方、どのような考え方を採ろうと、厚生主義は批判しない。…その上で、ある政策の当否を、その政策に対する個人の評価を集計して決定しようとする。具体的には、もしある政策が個人の生き方にとってプラスであるならば、その政策の実現はその個人に快樂をもたらすはずであるし、個人はその政策を選択するはずである。したがって、厚生主義は個人の生き方の問題に踏み込まず、政策がもたらす快樂、その政策に対する個人の選好だけを基礎として、政策を評価することを要求するのである」（若松「功利主義と立法の科学」、40-41 頁）。

#### ■経験(快樂)機械の思考実験

あなたが望むどのような経験でも与えてくれるような、経験機械があると仮定してみよう。超詐欺師の神経心理学者たちがあなたの脳を刺激して、偉大な小説を書いている、友人をつくっている、興味深い本を読んでいるとあなたが考えたり感じたりするようにさせることができるでしょう。その間ずっとあなたは、脳に電極を取り付けられたまま、タンクの中で漂っている。あなたの真正なさまざまな経験をあらかじめプログラム化した上で、あなたはこの機械に一生繋がれているだろうか？（『功利主義とは何か』、52 頁。もとのアイディアは R. ノージック『アナキー・国家・ユートピア』、67-71 頁）。

#### ■功利主義の正義原理

[功利主義の正義論の]中心をなす理念はこうである——社会に帰属するすべての個人の満足を総計した正味残高が最大となるよう、主要な制度が編成されている場合に、当該の社会は正しく秩序だっており、したがって正義にかなっている（ロールズ『正義論 改訂版』、32 頁）。



■ロールズの功利主義批判

◆諸個人の差異の無視・融合

その結果、功利主義に到達する最も無理のない理路は…ひとりの人間にとっての合理的な選択の原理を全体としての社会にも当てはめるというやり方になる。ひとたびこのことが認められれば、功利主義の思想史において、〈公平な観察者〉が占める位置や〈共感〉が強調されてきたことが容易に理解される。なぜなら、〈公平な観察者〉という考え方および私たちの想像力を導く際に〈共感〉を通じて諸利害を一致させる作用との二つに基づいてこそ、ひとりの人間にとっての原理が社会に適用されるものとなるからである。すべての人々の欲求を組織化して欲求の整合的なシステムをつくりだすことが求められており、この観察者こそがその欲求を実行するとみなされている。すなわちこうした解釈を組み立てることによって、多数の人びとが溶かし込まれてひとりの人間へと融合されてしまう。…以上のような社会観においては、別個独立の諸個人といえども、さながら流れ作業の別々の工程(different lines)のようなものと思念されてしまう。…社会的協働に関するこうした見方は、ひとりの人にとっての選択原理を社会にまで拡大適用した帰結であり、したがってこの拡大適用を有効なものとするためにこそ、公平で共感的な観察者の想像力の作用を通じて、すべての人びとが単一の人へと合体・融合(conflate)されてしまう。功利主義は諸個人の間の差異を真剣に受け止めていないのである（ロールズ『正義論 改訂版』、38-39 頁）。

◆欲求の質の問題

功利主義では、どのような欲求の満足もそれ自体で何らかの価値を有しており、何が正しいかを決めるにあたってはその価値が勘案されねばならない。満足の残高の最大値を計算する際には、種々の欲求の対象が何であるかは…問題にならない。…すなわち、人びとの欲求の源泉や質についてまったく問うことなく、欲求を充たした結果が社会全体の暮らしよさにどれほど影響を及ぼすのかだけを問題にするのである。社会全体の福祉は、諸個人の満足もしくは不満足の数値に…依存することになる。したがって、もし人びとが互いに差別し合うことを通じて、あるいは（自分たちの自尊を高める手段として）相対的により少ない自由を他の人びとにあてがうことを通じて、一定の快楽を感じるのであれば、そうした欲求を満足させることすらも…私たちの熟慮において比較考量されなければならない」（ロールズ『正義論 改訂版』、43-44 頁）。

◆心理的負荷の問題

しかしながら、効用原理が充たされたとしても、全員が便益を得られるという保証はまったく存在しない。社会システムへの忠実さは、ある人びと（とりわけ、あまり恵まれていない人びと）に対して、相対的利益を全体の善の増大のために差し控えるよう、強く求めるかもしれない。それゆえ、犠牲を払わなければならない人びとが、本人自身の利害関心を超えた広範な利害関心に自分を強く同定・一致させない限り、この制度図式は安定的にはならないであろう。しかし、こうした同定・一致をもたらすことは容易ではない。…私たちがさほど幸運に恵まれていないときでさえ、他の人びとがより多大な相対的利益を享受することを受諾せねばならない。…これが極端な要求であることは疑いえない。事

実、社会がそのメンバーの善（利益）を促進するように設計されている協働のシステムと考えられるならば、政治の原理に基づいて、一部の市民が他の市民のために、人生の見通しを低下させることを受諾するはずだと推定するなどということは、まったく信じがたい（ロールズ『正義論 改訂版』、241-242 頁）。

#### ■センの功利主義批判

##### ◆「適応的選好形成」の問題

効用計算は、持続的な剥奪を受け、不利な状況に対して自分の期待のほうを適応させてしまった人びとに対して深刻に不公正なものとなりえます。階層化された社会における恒常的な負け組、不寛容な共同体において持続的に抑圧されている少数派、不確実な世界で希望も持てないほど不安定な小作人、搾取的な経済の仕組のなかでいつも働きすぎのスウェットショップの被雇用者、激しく性差別主義的な文化のなかで永遠に服従させられた家庭内の妻といった事例を考えてみてください。慢性の——そして終わることのないように見える——剥奪を受けている人びとは、きわめてしばしば、純粹に生き延びる必要のためだけに、彼らの直面する剥奪と折り合いをつけてしまうのです。その結果として彼らは、可能性があると控えめに見積もった物事に合わせて、彼らの欲求と期待を調整するでしょう。そしてほんのわずかばかりの慈悲に快楽を感じる可能性を育ててしまうでしょう。快楽ないし欲求という尺度は剥奪と不遇さに対する確実な指針となるには、まさにあまりにも信頼できなさすぎるのです。対照的に、こうした慢性的に剥奪を受けている人びとが真の自由を欠いていることは容易に見て取れるでしょう。そうした自由が大事なのです（セン「人権と私たちの義務」、14 頁）。

##### ◆物質的条件の無視／評価の無視

効用に基礎をおくアプローチ全体が、実はきわめて貧困な理論なのである。効用に対するどのような見方も、(1)人の心的な態度に全面的に基礎をおくこと、(2)その人自らの評価作業——ある種の生き方を他の生き方と比較して評価しようとする知的活動——への直接的な言及を避けること、という二重の性格を共有している。私は、前者を<物的条件の無視>と呼び、後者を<評価の無視>と呼ぶことにしたい。／食物に欠乏し栄養不良であり、家もなく病いに伏せる人ですら、彼／彼女が「現実的な」欲望をもち、わずかな施しにも喜びを感じるような習性を身につけているならば、幸福や欲望充足の次元では高い位置にいたことが可能である。人の物的条件は、幸福という心的態度や欲望によって間接的にとらえられることを除けば、幸福や欲望充足に全面的に依拠する福利(welfare)の見解のなかには占める位置をもたない。さらに、どのような種類の人生が生きるに値するものであるかに関してその人自らがいなく評価を無視することになり、〔この〕アプローチはその人の福祉(well-being)に関わる重要な事実さらにいっそう眼を閉ざすことになる。…／私たちが実際に獲得するもの、また入手することを無理なく期待できるものに示す心理的な反応は、往々にして厳しい現実への妥協を含んでいる。極貧から施しを求める境遇に落ちた者、かろうじて生き延びてはいるものの身を守るすべのない土地なし労働者、昼夜暇なく働き詰めで過労の召使い、抑圧と隷従に馴れその役割と運命に妥協している妻、こういった人びとはすべてそれぞれの苦境を甘受するようになりがちである。彼／彼女らの窮状は平穩無

事に生き延びるために必要な忍耐力によって抑制され覆い隠され、(欲望充足と幸福に反映される)効用の物指しにはその姿を表さないのである(セン『福祉の経済学』, 35-36 頁)。

#### 〔文献〕

ジェレミー・ベンサム『道徳および立法の諸原理序説』、関嘉彦責任編集『ベンサム J・S・ミル』（中央公論社, 1979 年）。

Robert E. Goodin, *Utilitarianism as a Public Philosophy* (Cambridge University Press, 1995).

ジョシュア・グリーン（竹田円訳）『モラル・トライブズ』（岩波書店、2015 年）。

R. M. ヘア（内井惣七／山内友三郎監訳）『道徳的に考えること レベル・方法・要点』（勁草書房, 1994 年）。

伊勢田哲治「功利主義とはいかなる立場か」、伊勢田哲治／樫則章編『生命倫理と功利主義』（ナカニシヤ出版, 2006 年）。

児玉聡『功利主義入門』（ちくま新書, 2012 年）。

ウィル・キムリッカ（千葉眞／岡崎晴輝訳者代表）『新版 現代政治理論』（日本経済評論社, 2005 年）。

カタジナ・デ・ラザリ＝ラデク／ピーター・シンガー（森村進／森村たまき訳）『功利主義とは何か』（岩波書店, 2018 年）。

ウィリアム・マッカスキル(千葉敏生訳)『<効果的な利他主義>宣言——慈善への科学的アプローチ』（みすず書房、2018 年）。

ジョン・スチュアート・ミル『功利主義論』、関嘉彦責任編集『ベンサム J・S・ミル』。森村進『幸福とは何か』（ちくまプリマー新書、2018 年）。

ジョン・ロールズ（川本隆史／福間聡／神島裕子訳）『正義論 改訂版』（紀伊國屋書店、2010 年）。

ジョン・ロールズ（田中成明／亀本洋／平井亮輔訳）『公正としての正義 再説』（岩波書店、2004 年）。

フィリップ・スコフィールド（川名雄一郎／小畑俊太郎訳）『ベンサム 功利主義入門』（慶應義塾大学出版会、2013 年）。

アマルティア・セン（池本幸生／野上裕生／佐藤仁訳）『不平等の再検討』（岩波書店、1999 年）。

アマルティア・セン（鈴村興太郎訳）『福祉の経済学——財と潜在能力』（岩波書店、1988 年）。

アマルティア・セン（谷澤正嗣訳）「人権と私たちの義務」、『早稲田政治経済学雑誌』394 号。

ピーター・シンガー（山内友三郎／塚崎智監訳）『実践の倫理 [新版]』（昭和堂、1999 年）。

鈴村興太郎「アマルティア・センの規範的経済学」、『早稲田政治経済学雑誌』394 号。

若松良樹編『功利主義の逆襲』（ナカニシヤ出版、2017 年）。

以上